



教育文化・家の光プランナー



内山 亮一

佐賀県 J A さが生活燃料部 部長

うちやま・りょういち／1994年、J A 佐賀経済連（当時）に入会、施設住宅部住宅課に配属。1997年の県内3連合併（経済連、園芸連、酪連）後は主に管理部で広報や企画業務を担当。将来の県内1 J A を見据えて2007年に県内8 J A が広域合併し、経済連を包括承継した J A さがの総務部門で12年間勤務。支所の統廃合や旧 J A のエリア集約化、役員体制の変更や役員定年延長等の実務を経験。2023年から現職。関連子会社5社の非常勤取締役も兼務。

J A さがは2007年に県内8 J A が合併し、誕生した県域 J A です。総務部門で経験した、合併にまつわる様々な知見などを活かして活躍されている内山部長に、ご自身の農協人生の歩みや、力を入れている女性部活動に関する取り組みなどについてお聞きしました。

■ JA 地域に農協の灯を

——内山部長は J A 佐賀経済連（当時）に入会され、施設住宅部住宅課で勤務、県内3連合併後は企画広報・農畜産加工事業などに携わりました。J A さが発足後は総務部門での12年の勤務を経て現在の生活燃料部に至ります。

私は1994年に J A 佐賀経済連に入会しました。もともと父の実家が専業農家だったこともあり、J A の建物や営農施設は身近な存在でした。経済連に入会後は、施設住宅部に2年勤務後、県内3連の合併・J A さがの発足などを経て本当に様々な部署・業務を経験しました。

県内3連が合併してできた新生経済連で印象深かったのは、管理部や農畜産加

工部に配属されていた時のことです。それぞれ4年所属しており、管理部では広報・企画などを担当していました。今年開催47回目を迎えた農機の大展示会がルーツの「さが農業まつり」も当時の担当で、それまでは県内各地を会場としていましたが、私が初めて担当した第23回以降は佐賀空港の近隣の空き地で2月初旬に開催しています。当時はスマホもない時代で、空港周辺の地図を繋ぎ合わせて事故が起きないように誘導ルートを考えたり、目玉イベントとしてデビュー間もない氷川きよしさんのミニコンサートを企画して、大変盛況だったことも思い出の一つです。他県からの視察も多く、農家はもとより地域の皆さまに定着したイベントだと思っています。



さが農業まつりの様子。うれしの茶コーナーは売り切れるほどの人気

農畜産加工部では冷凍食品の販売推進、工場の生産管理、OEM窓口などを担当しました。普通の会社なら部門が分かれるような仕事でも、一つの部署で包括的に業務を担当できたので、メリットも多かったように思います。OEMでは大手メーカーの受託製造などを請け負い、冷凍ピラフなどの製造に携わっていました。今でもスーパーに並んでいる新商品を見つけると、自然とパッケージの裏面の工場番号を見てしまいます。一種の職業病ですね(笑)。

そのあとは管理部に戻り子会社の再編等に携わっていましたが、私のキャリアの中核を占めているのは、やはりJAさが発足後に総務部門で課長代理から部長までを経験した12年間です。中でも、3年ほど地区勤務をして支所の統廃合に注力していた時のことは思い出深いです。ある中山間地の3支所を1支所へ統合する難しい提案をした際は、時には雪も舞う寒いなか地区の公民館単位まで含め十数回説明会を重ね「今ここで支所を集約できなければ、最終的には体力を削るだけで全撤退になってもおかしくはない。地域から農協の灯を消すわけにはいかない」という思いを、時にはデータを示しながら役職員とともに真摯に説明し続けて何とか話がまとまりました。ATMや店舗の存置の話が一段落すると、今後の中山間地での営農振興をどうするのかといった未来志向の話が中心となっていく、JAらしさや組合員とのつながりを実感しました。統廃合後の新支所長が定年を迎えられた際、年下の私の部署をわざわざ訪ねて下さり当時の取り組みに感謝の言葉をいただいたことはささやかな誇りです。

支所統廃合を終え本所に戻ったら、今度は県JA会館の移転事務局を担当することになり、旧会館から新会館への移転に奔走しました。什器類の選定やレイアウト、ゾーニングなど短期間で決定しなければならないことが山ほどありました

が、いかんせん前例がないことなので
当時は時間との闘いでしたが、ここでも
良い経験ができました。

2023年からは現職の生活燃料部の
部長になりました。生活課(教育文化・
女性組織活動、共同購入・食材宅配・
直販店舗・茶販売・葬祭・宅地等
供給事業等)と燃料自動車課(県内 J
A S S の運営管理、燃料仕入・供給
等)を管轄しています。現業部門は、
スタンドや店舗の売上など数字を直に
感じられる醍醐味があり、総務部門と
はまた違った難しさとやりがいを感じ
ています。



県 J A 会館の外観。2017年2月竣工で J A グループ佐賀の運営拠点となっている

■ フレミズ加入促進の課題

——現在、J A さがでは女性部活動の促進、特にフレミズ世代への P R に力を入れています。詳細をお聞かせください。

J A さがでは2015年ごろから「代表理事と女性組織部長との意見交換会」を開催しています。そこでの話題の中心はやはり、女性部活動の充実と、それをいかに加入促進につなげるかということです。これまでフレッシュミズ世代を増やそうと、准組合員向けの広報誌にフレミズ部員の対談を掲載したり、地元ローカル局にテレビ C M を打ったりするなど、あれこれ取り組んではいますが、まだ具体的に数字に表れてはいないのが現状です。

「日本農業新聞」や『家の光』に掲載された1年分の県内女性部の活動を概観してみても、まだまだ県全体に波及できる余地があり、地道な取り組みの必要性を感じています。

今の女性部活動の促進には「新たに外部の人に参加いただく工夫」に併せ「今の仲間の輪を外に広げていく」ことが重要だと、フレミズ代表者との意見交換を重



フレミズ部員の対談の様子。准組合員向け広報誌「もぐっとさが」に掲載し活動を P R している

ねるうちに考えるようになりました。J A の地区や支部を越えた柔軟で参加しやすいイベントの企画などに加え、他県や全国のフレミズの交流から気づきを得ることも大切にしていきたいです。

今年8月には佐賀県で開

催予定の九州地区の女性組織・フレミズ研修会で各県フレミズの交流機会を設けることを企画しており、より女性部活動を活発にするための1つの契機にしたいと思います。

■教育文化活動研究集会での学び

——2024年11月には「教育文化活動研究集会」にご参加されました。

参加のきっかけは、まず教育文化活動の全体像を知り、そこに集う人の考えを吸収したいと思ったからです。実は私が生活燃料部の部長になった当初は、J A さがの本所にプランナーがおらず、教育文化活動について相談できる人がいない状況でした。今回研修に参加して、グループワーク等を通して異なる地域のプランナーの皆さんの状況や取り組みを伺ったことで、現在のJ A さがの置かれている状況と対比して考えることができました。

J A さがの教育文化活動は県中央会から機能に移管されたものですが、独立した「教育文化活動基本方針」などはなく、中期事業計画のなかの一項目にとどまっている状況です。研修全体を通して参考にできる部分を、J A さがのスケールに合わせてどのように展開すべきか考えていきたいと思っています。

■「見えない財産」をはぐくむ

——教育文化活動についての思いをお聞かせください。

J A の教育文化活動は効果が数値化しがたい分野で、短期的な成果を求める風潮が強くなっている昨今、腰を据えて取り組むには担当者の自覚と役職員全体の理解が必要です。

教育文化活動を通じた地域や人のつながりの中で育まれた「見えない財産」は、それが地域で創造・蓄積・伝承されることで、組合員や利用者の心の豊かさや帰属意識の醸成につながり、J A 事業の基盤にもなるのだと思います。J A 側の都合による教育文化活動ではなく、組合員や地域住民のニーズを捉え、J A 部会組織の活動充実を支援し、地域の活性化やJ A への理解を促進させるべく様々な活動に取り組むことがプランナーの大きな役割だと私は考えています。

特に総合J A では、事業内容が高度化・専門化するなか職員は目の前の担当業務に集中せざるを得ず、本来であれば意識すべき協同理念や教育文化活動の意義が希薄になっているのではと感じます。だからこそ教育文化プランナーという立場で得た知見を組織内で広め共有していく必要があると思います。

管内の人口減少もあって、J A の教育文化活動や事業運営も難しい判断を迫られていますが、あまり悲観的にならず、未来につなげる取り組みをしていければと思います。